



Title	論談：IAHR第20回国際宗教学・宗教史学会議トロント大会に参加して
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	中外日報
Issue Date	2010-09-04
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/48081
Type	column (author version)
Note	中外日報 2010年9月4日掲載
File Information	Chugai_Toronto.pdf



[Instructions for use](#)

1 東京大会からトロント大会へ

2005 年 3 月、東京で第 19 回大会が開催され、成功裏に幕を閉じてから 5 年経った。東京大会では、国内外から千数百名の研究者・宗教人を招いて、新高輪プリンスホテル飛天の間で全体会議がなされた。実行委員会の規模と実働部隊の多さ、及び日本が示した海外の研究者達に対する歓迎ぶりは、歴代の大会においても群を抜いたものだったのではないかと。

今回はシンプルな大会運営だった。会場はトロント大学の校舎に分散。大会予稿集は配布されず、電子版のみ。会場担当者もほとんど見うけられなかった。10 本の全体会議講演、192 本の部会セッションはかなりなものだが、発表者を除いた聴衆はほとんどいなかったのではないかと。ちなみに最終日の最後の時間帯に日本のパネル 5 本が割り当てられ、私の部会はわずか 3 名の聴衆しかなかった。全体の講演も毎回 2, 300 名程度だった。

会期は 2010 年 8 月 15 日から 21 日までの 7 日間だったが、プログラムの公表を待って飛行機や宿泊先を確保するわけにもいかず、ほとんどの参加者が 8 日間あまりの滞在となった。しかし、かえって骨休めになった感もある。中日に学会主催のナイヤガラ滝見物は圧巻だったが、それ以上に、猛暑の日本列島から移動した日本人にとって、湿度が低いトロントの夏は実に過ごしやすかった。朝晩は上着が必要なほどだ。多国籍・多文化都市トロントは、アジア系の私たちが違和感なく町を歩ける人口 350 万の大都市だった。

2 「宗教—相克と平和」から「宗教—人間の現象」へ

東京大会では、「戦争と平和—その宗教的次元」「テクノロジー・生命・死」「グローバルな宗教と地域文化」「境界と差別」「宗教研究の方法と宗教理論」に関して主題講演と応答がなされ、各地域の宗教文化や宗教の多様な研究領域・アプローチに配慮した構成だった。

ところが、今回の主題の設定は、現代社会との関わりにおいて宗教学的な議論を設定した東京大会とは明らかに異なった。宗教を人間のいとなみとして人文科学・自然科学の対象にすえるという立場が明確であり、この線に沿った全体会議の講演は、「進化の産物としての宗教」「氷河期人類における芸術・直感的道徳・愛の進化」「認知科学から壮大な作り話としての宗教を見る」「エコロジー運動ほどの程度宗教現象として考えられるか」「無神論のパラドックス」「合衆国の進化論・創造説と憲法判断」と 10 題中 6 題。残り 4 題は、メディア論、ポスト・コロニアル論、世俗化論と絡めた宗教学であり、純粋に宗教経験を扱ったものは 1 題のみだ。

内容もさることながら、講演者の構成は、7 人のアメリカ関係者（1 名のみインド人）、2 名のカナダ人、1 名のドイツ人と北米が独占している。全体セッションは 1 時間の講演で終わり、質疑は特になされなかった。人間科学の教育講演を参加者に聞かせたかったのか。

いささか脱線気味の議論になる。本大会の非宗教的雰囲気とは対照的に、世論調査によ

れば 42%のアメリカ人が進化論を拒否し、神は現在のままの地球と人間を作られたという創造説を信じ、創造説を生物の授業で進化論並みに扱うことを権利として要求する裁判が継続されている。キリスト教世界や政治の場を席卷する福音主義（教会）に対抗した科学的研究を行おうとするのであれば、宗教学といえども、過剰に宗教的教説（特定の、或いはあらゆる信念や世界観）に距離を置いた研究を志向せざるをえないのだろう。

しかし、無神論がキリスト教文化の中でこそ活力を得てきたように、徹底して宗教を人間・社会現象として見ていこうという学問的志向もまた、キリスト教の影響力の強い社会ならではのものと思われる。つまり、世俗と宗教、科学と信仰、常識と信念といった住み分け方に安住することなく、一方で他方も含めた全てを説明しなければ気が済まない、という指向性は宗教的世界観に近く、人間科学も世俗化された神学として機能している。その中心に生物進化学や認知心理学から宗教を説明し直すという研究がある。

生物進化学によれば、集団として生存戦略を図るホモ・サピエンスは、協力行動（間接互惠あるいは一般交換）を促進し、違反者やただ乗りの人間に制裁を与える規範を作り出す。宗教的倫理や禁忌はこの規範の文化的表現であり、これによって血族を超えた集団間の結合や維持が可能になった。神、聖なるものはこの過程で生み出された副産物であり、宗教にとって本質的なものは集団内の内発的な強制力、規範というわけである。

認知心理学は、1990年代より領域限定的な認識（常識的判断等）と宗教的（超自然的）認識の差異や、ルーティーンと儀礼における感情の差異を、実験によって明らかにしようとしてきた。暫定的な知見としては、超自然的な存在を想定することで、超越的高みから人々の行動や態度に影響力を行使できること（誰も見ていないという逃げが不可能）、儀礼が人々の一体感を強め、集合的記憶（社会的記憶）や感情を強く惹起すること、といったことである。デュルケムの『宗教生活の原初形態』で論じられた事柄とほとんど同じことが、各種の実験、ゲーム、脳画像や心拍数の測定などの手法により確認されている。

3 メノナイト・ファーム見学

学会では宗教施設や歴史遺産の見学ツアーがなかったので、國學院大学の井上順孝教授・平藤喜久子准教授の手配により、日本人 12 名でメノナイト・ツアーに出かけた。

メノナイトとは、16 世紀にヨーロッパで広まったアナバプテスト派による宗教改革運動において、カソリックの神父メノ・サイモンに率いられた教派である。アーミッシュは、17 世紀にメノナイト内部の改革運動により離脱したジェイコブ・アマン創始の教派を指す。両派ともヨーロッパでの迫害を逃れて新大陸に移住し、独自の教会・教派とコミュニティを形成した。

2006 年のメノナイトの人口は、世界 65 カ国に約 150 万人、合衆国に約 36 万人、コンゴ、インドに次いで、カナダには約 13 万人おり、アフリカ地区の信者数増加が著しい。カナダのメノナイトの大半はメノナイト・ブレズレンの人達であり、古い秩序派（オールド・オーダー・メノナイト）は約 5 千人、オンタリオ周辺では 3 千人とされる。

筆者達は、「大草原の小さな家」を彷彿させる簡素な衣服、馬車を常用し、電化製品等を

一切用いない古い秩序派が居住する地域の市場や農場、教会と学校、墓地等を見学した。

世俗の制度（政府による社会保障の恩恵も受けなければその分の税も払わない等）と争い（良心的兵役拒否）を回避することでこそ得られる心の平安もあるだろう。迫害から逃れる（サバイバル）ための生活が独自の信仰とライフスタイルを形成してきたが、それによってメノナイトが拡散することなく維持されてきた。宗教とは人間が社会変化への適応を最適化する方法なのかもしれないが、二百年も前の生存戦略が現在も使われていることの重さを、墓地に並ぶに大小様々の簡素な墓石に感じざるをえなかった。